



War Cry

2月号

福音版
2022
February
No.2830

二〇二二年 二月一日発行

明治二十八年創刊

福音版・毎月一日発行

広報版・奇数月十五日発行(除く七月)

心と体をケアする

吉田 眞



明治40(1907)年4月20日 澁澤栄一氏別邸にて。ウィリアム・ブース大将(前列中央白いひげの人物)と澁澤(向かって左隣)が並んで写っている

澁澤と救世軍の理念
昨年のNHK大河

ドラマの主人公澁澤栄一は、いろいろな形で救世軍の活動を支えました。その背景には、澁澤の「道徳経済同一説」が、救世軍の「霊と心と体」に奉仕する精神に似通っていたことがあると言われます。「道徳経済同一説」とは、道徳心に裏付けされた利益の追求



が本当の資本主義である、という考え方で、「道徳が欠けていたならば、いかに経済上の発展があったとしてもいざれ争いが起き、経済は破綻してしまおう」というものです。

事実、彼は、明治四十年に救世軍の創立者ウィリアム・ブース大将が来日した際に、東京市会議事堂で開催された歓迎会において、次のような歓迎の言葉を述べています。要約すると、「わたしは救世軍が、二つの性質をもっていると聞いている。キリストの福音を伝えるという点では宗教団体であり、貧しい人や虐げられた人々を救済する

ことに力を尽くしている」という点では社会的なものである。わたしは、その宗教的活動については大きな敬意を払い、社会的活動に感謝をする。本来宗教の使命は、神と人との調和、人々の救済

にあるのであって、その目的を達成しようとすれば、霊心と肉体との両方面にわたって救済をしなければならぬ。なぜなら、人は霊的存在であるとともに、衣食を必要とする肉体的存在だからである。ブース大将は、救世軍を経営するにあたって、一つに偏することなく、福音の宣伝によって霊心を慰め、諸種の社会的事業によって実際の救済をおこなっている。いわゆる、左手に聖書を掲げ、右手にパンを携えてその事業をおこなっている。それ故わたしは、この老偉人を心から歓迎する。」

イエス・キリストによつて救世軍の働きは心と体の両方に仕えるという理念の上になり立っており、それは聖書の考え方に沿っています。歩くことのできない一人の男がイエス・キリストのもとに連れて来られるという話が聖書に載っています(マルコによる福音書2章11-12節、ルカによる福音書5章17-26節)。この人は、体が病んでいるだけでなく、心も病んでいます。イエスがあちこちで奇跡を起こしていることを聞き、彼の四人の友人が、彼を床に乗せてイ

エスのところに運んできました。イエスは、彼に向かい、「あなたの罪は赦された」と言います。彼が、心も病んでいたことを示しています。そして、さらにイエスが「起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」と命じると、彼は立ち上がり、歩くことができるようになるのです。

さて、「歩くことができなかつた」事実の中に、彼のもつていた本当の病が顕されていきます。その事実によつて象徴される状態は、まず、人は本来、自分一人では歩けない、すなわち他者の助けを要することであり、さらに、そのことを自覚しない人間の傲慢さが示されます。また、人に運ばれているという姿からは、周りの環境や、価値観に揺れ動いているわたしたちの姿が見えます。そこにキリストが、「床を担いで歩け」と命じます。その結果、彼は、実際に歩くことができようになるとともに、変わることはない基盤、価値観の上に立つた本当の自立を手に入れます。人は、まさに心と体から成る存在であり、その両方へのケアが、キリストによつてなされるのです。(救世軍士官(伝道者))



明治40(1907)年4月18日 東京市主催の歓迎会。前列左2人目より島田三郎、千家尊福、阪谷芳郎、大隈重信、ブース大将、大山巖、尾崎行雄、澁澤栄一。2列目左から3人目に山室軍平



澁澤栄一と救世軍

吉田 眞

日本で救世軍の活動が始まったのは明治二十八年(二八九五)年です。イギリスから派遣された救世軍士官(伝道者)たちと、翌二十九年に日本人最初の士官となった山室軍平らは、キリストの福音伝道とともに娼妓の自由廃業運動、出獄人保護など多様な社会事業に取り組みました。世に知られ始めた救世軍のその後の発展は、澁澤栄一をはじめとする援助者たちの、深い理解と支援とに支えられてのことでした。

創立者ウイリアム・ブースの

来日を契機に

澁澤栄一と救世軍の関わりは、明治四十(一九〇七)年、救世軍の創立者ウイリアム・ブースが来日した時に、創立者の歓迎会の発起人の一人としてブースを歓迎したことに始まる。これについては、発起人の一人となることを依頼するために、山室軍平が、島田三郎(後の衆議院議長)の紹介で、澁澤を訪ねている。創立者の来日は、日本の救世軍にとって、大きな飛躍のきっかけとなった。その一つが日本における医療事業の開始である。来日の際、ブースは、日本に貧困者に対する医療事業の必要なることを感じ、その事業を始めることを勧めるとともに、澁澤にも、それを支援してほしいと頼んだ。後日、英国の万国本営より、英国の篤志婦人から寄贈された五万ポンドが送られ、それと同時に日本で募金活動が始まった。『竜門雜誌』(注)によれば、「我が国の人たちのために、英国よりこのような寄付を送ってきたからには、我が国においても、このような施設の建設を實行しその好意に報いたい」と、募金趣意書に記されている。このようにして、澁澤は、大隈重信、尾崎行雄等と共に、「貧民病院建設慈善観劇会」を計画し、その収益金八千円を寄付している。この観劇会の開催については、山室の語ったこんな話がある。

れに対する意見を求められた。これはこの種の有力者が、救世軍の事業に、何等かの援助を与へることを考えた、最初の機会であった。それゆえ私は恐る恐る彼らに対してこう言った。「救世軍では平生、その仲間の者に、なるだけ観劇に行くなと教へております。それなのにこの度に限り、救世軍のためであるから観に行けと言ったのでは、平生の主張と違う所があります。それ故大変失礼ではあります。それが、この度の御催しに対し、私共救世軍の者は切符一枚売らず、又誰一人見物に参らないことに願いたいのであります。如何なものでしょう」と申出ると、子爵は不思議そうな顔をしておられたが、やがて『それが若し君の主義なら、主義は大切に守られたがよからう。但しさうして作った金は、受取らない



院病軍世救

澁澤らの支援を受け完成した仲御徒町の救世軍病院

といふかね」と尋ねられた。それで私は答へた。「救世軍の創立者は、種々なる人々から贈られた金を、残らず寡婦と孤児との涙で洗って使うと言はれました。私共もその流儀で、あなた方が御作り下さる金を拝受すべく、それをどうして作られたかまで詮議する責任は無いかと存じます」と。山室の主義・信念を通す意志と、澁澤の懐の広さを示す逸話ではある。(『愛の奉仕』山室軍平編(昭和七年四月発行)より引用)

さて、明治四十五(一九一二年)に東京・下谷区仲御徒町に救世軍病院が完成

し、訪問診療を進めていくうちに、山室は結核患者の多さに気づき、結核療養所の設立の必要性を感じる。そして現在の杉並区和田に救世軍療養所の設立を計画する。澁澤は、これにも賛意を示し、大正二(一九一三)年十一月三日、大隈重信・森村市左衛門・江原素六・島田三郎等と連名で「救世軍療養所設立に賛助を仰ぐ状」を発表し、各所に賛助を仰ぐとともに、自身も千五百円を寄付している。開院式(大正五年十一月)には、風邪のために出席できなかったが、次のような内容の祝辞を送っている。

拝啓 本日は、救世軍結核療養所の落成にあたり、私もぜひ出席し、建

物も実際に目にし、経営に役立つよう、幾分かの寄付も持参したいと思っていたが、ここ数日、風邪気味で、外出もままならない状態であること、ご了解ください。……一昨年来の欧州の戦乱は各所に影響を及ぼし、……失業者の数も増えていきます。この際、弱者を保護する働きは特に注意を必要としています。それ故、私は、救世軍が各所において、救済事業に尽くしておられることに敬服しております。今日、出席ができませんが、私の思いを申し上げ、感謝の思いをお伝えいたします。

敬具

それ以後も、大正七(一九一八)年の、救世軍希望



大正15(1926)年10月 澁澤栄一子爵と、来日した第2代救世軍大將ブラムエル・ブース

た渡辺得男氏(澁澤家の執事)が来訪し、澁澤子爵に信仰を説いてくれないかとの申し出があり、喜んでそれを受けたことが記されている。この出来事については、山室軍平の日記と共に、前述の「澁澤子爵を偲ぶ」の中でも見ることが出来る。山室は、昭和六年七月九

山室軍平による聖書講義

館の新築落成式に祝辞を送るなど、救世軍の各種事業を支援するとともに、救世軍の二代目大將ブラムエル・ブースや、当時の全米救世軍総司令官エバンゼリン・ブース中將が来日した際にも、王子飛鳥山の私邸に招き、彼らを歓待している。澁澤の召天にあたり『ときのかえ』に掲載され

た「澁澤子爵を偲ぶ」の中で山室は、「去る二十数年間私どもが計画した事業の中で、子爵の援助を受けなかったものはほとんど無い。私のために書いてくださった紹介状だけでも、少なくとも四五百通に上る」と、澁澤の救世軍に対する支援の大きさにについて述べている。

澁澤・山室両者の親交の深さを示す出来事として、昭和六(一九三一年)年、亡くなる直前の澁澤に対して山室軍平が三度、聖書の講義をおこない、回心させようと試みたことが挙げられる。山室軍平の日記には、澁澤兼子夫人の意を受けた澁澤兼子夫人(澁澤家の執事)が来訪し、澁澤子爵に信仰を説いてくれないかとの申し出があり、喜んでそれを受けたことが記されている。この出来事については、山室軍平の日記と共に、前述の「澁澤子爵を偲ぶ」の中でも見ることが出来る。山室は、昭和六年七月九

澁澤の永眠と山室軍平の弔電

記にあり、澁澤が亡くなる直前まで、山室は澁澤をキリスト教へ「回心」させようとしていた。ここには、山室軍平が、救世軍に対する支援者としての澁澤と、

山室軍平は、澁澤が亡くなる直前に王子飛鳥山の澁澤邸を訪問し、澁澤の健康状態を尋ねていたことなどの当時の行動を、次のように記している。

「此度九州から沖繩へ出征するに付、その間に、あるいは澁澤子爵の逝去を聞くようなことになりはしないかと、所謂虫が知らずるのを覚え、出発の当日、即ち十一月五日の朝、もう一度飛鳥山に子爵を訪ね、敬三氏(栄一の孫)その他に面會。」

山室は、澁澤邸を訪問した後、その日の午後九州へ向かい、熊本から鹿児島を経て、沖繩へ向かう船上で澁澤の訃報を聞いた。

もう少し近いところならすぐにでも取って返したかったが、沖繩行きの船中ではそれもできないので、大島(奄美大島)に立ち寄った時、次のような弔電をし

救いを必要とする一人の人間としての澁澤の両方を見ていたことがわかる。山室軍平の、経営者でありながら、その本質は伝道者である姿が見える。

ため、兼子夫人に送ったため、子爵が去る二十年来、援助を与えてくださったことは数えきれません。本当に救世軍の恩人です。私個人としても、子爵の知遇を得たことは、大きな感激です。今その永眠を聞き、哀悼にたえません。不幸にして旅行中で遠方であり、葬儀に参列できませんので、謹んで弔電をお送りします。神様のお恵みを祈ります。」

澁澤ははじめ明治の名士たちに支えられ発展した救世軍は、戦争の試練の時代を越え、今に至るまで様々な社会状況の変化の中でも、人の心と体との両方へのケアを基本として、活動を続けています。

(注)『竜門雑誌』は、澁澤栄一記念財団の前身である竜門社が発行していた刊行物。

創立者 ウィリアム・ブース 大将 ブライアン・ペドル (万国本営 英国ロンドン) 日本司令官 スティーブン・モーリス (救世軍本営 東京都千代田区)



世界をみつめて

〈米国〉 竜巻被災現場での支援

昨年12月10日夜から11日にかけてアメリカ南部や中西部の6つの州で竜巻が相次いで発生し、各地で建物が倒壊し、100人以上の死者が出るなど大きな被害がありました。救世軍ではキャンティーカー(移動給食車両)を被災現場に派遣して、救助作業員や被災者に食事と飲料の提供をし、カウンセリングをおこないました。写真は被害が最も大きかったケンタッキー州での活動の様子です。



〈カナダ〉 洪水被災地での支援

昨年11月下旬にバンクーバーを中心に記録的な豪雨による洪水が発生し、ブリティッシュ・コロンビア州の全域で壊滅的な被害を受けました。救世軍ではキャンティーカーを派遣して、救助作業員や被災者への食事の提供とカウンセリングをおこないました。

〈日本〉

●山谷での給食活動

東京の上野小隊(教会にあたる)では毎月、山谷で街頭給食をおこなっています。12月には食事と共に毛布も配布し、85人の利用者がありました。この活動には多くの皆様から寄せられた社会鍋の資金が用いられています。



●ドネーションイベント

12月1日、渋谷区にある「ブリティッシュスクールイン東京」で救世軍のためのドネーションイベントがおこなわれました。学校のPTAの方々を中心に企画され、ご家庭で使わなくなった衣類、おもちゃ、本、日用品などを寄贈していただきました。学校の下校時間に合わせてイベントを開始し、生徒や保護者の方々が続々と品物を持ってきてくださいました。2時間後にはトラックが寄贈品でいっぱいにな

りました。これらは、救世軍バザーで活用されます。お一人おひとりのご協力に心から感謝いたします。

〈シンガポール〉 高齢者介護施設での取り組み

チャンギで救世軍が運営する高齢者介護施設「ピースヘイヴン」は、高齢者のリハビリテーションにゲームやコンピューターなどの新しい感覚を取り入れたジェード・サークル・アリーナ(JCA)を開設しています。昨年10月から12月にオンラインで開催された世界介護事業見本市(ワールド・エイジング・フェスティバル)で、このJCAがベスト介護事業賞を受賞しました。高齢者がいろいろな世代と交流しながらゲームを楽しむことで、認知機能とバランス感覚の回復や維持が促進される仕組みとなっています。



救世軍とは? What is The Salvation Army?
心は神に 手は人に Heart to God, Hand to Man

救世軍は、英国ロンドンに国際本部を置く、世界132の国と地域で活動するプロテスタントのキリスト教会です。1865年、英国のメソジスト教会の牧師ウィリアム・ブースと妻カサリンによって始められ、東ロンドンのスラム街で困難な生活状況にある人々に助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。日本では1895(明治28)年以来、今日に至るまで多くの理解者、支援者に支えられ、活動が続けられています。昨年末におこなわれた救世軍社会鍋には多くのご協力をいただき、感謝いたします。寄せられた尊いご献金は、年末年始にかけて作業所や施設への支援のために、また年間を通じて、災害時の緊急支援活動、子ども食堂の実施、街頭生活者支援などのために用いられます。

※現在の新型コロナウイルス感染症の影響下においても、救世軍の小隊、社会福祉施設、病院は、感染予防策に最大限努力し、活動を続けています。

救世軍公報 ときのごえ

発行日 福音版/毎月1日、広報版/奇数月15日(除く7月)
定価 福音版/1部40円、広報版/1部100円
(税込) クリスマス特集号(12月1日号)/1部100円
振替 00180-5-4400
発行兼 救世軍
印刷人 代表者 スティーブン・モーリス
編集人 山谷 真
発行所 救世軍本営 <https://www.salvationarmy.or.jp>
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
電話 03-3237-0881(代表)
Mail jpn.editorial@jpn.salvationarmy.org
印刷所 ピーアンドエス



聖書は新共同訳を使用しています ©共同訳聖書実行委員会 ©日本聖書協会 救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、下記救世軍にご相談ください。

【取り扱い支部】

救世軍への連絡をご希望の方は、以下の項目及び住所氏名をご記入の上、救世軍本営(左記)、もしくは、上記救世軍にご連絡ください。
・私の近くの救世軍を紹介してください。 ・キリスト教についてもっと知りたいです。
・『ときのごえ』の購読を申し込みます。 ・相談を希望します。